暮らしの中の川
阿賀野川流域千唐仁の生活文化とその変容

River Reflected in Everyday Life

関 礼子

❶人と自然
❷川から陸へ
❸視線が交錯する原風景としての川
❹川での用事
❺切れた関係
❻引き継がれる関係
❼おわりに

[論文要旨]

本稿は，新潟県阿賀野川流域の千唐仁集落で，人びとが阿賀野川と紡いできた関係性の変化に着目して，以下の二点を明らかにする。第一は，生活様式の変化による川との「疎遠」，新潟水俣病などを契機とした川との「分断」が，人びとと川との関係性を弱めてゆく過程についてである。第二は，それにもかかわらず，盆の「川送り」のように，現在まで引き継がれてきた関係性があるという点である。

だが，後者についても，ゴミ問題との絡みで関係性の持続が難しくなる兆しがある。本稿では，切れた関係を参照しつつ人と川との新たな関係性を創出する「仕掛け」を考えるだけでなく，引き継がれている関係を肯定するような「仕組み」の必要性を指摘する。

❶……人と自然

一側面からみた合理的な自然の改変は，他側面からみて必ずしも合理的であるわけではない。自然にはそれぞれ個性的な相貌がある。身近な自然であればあるほど，自然には，生業活動や生活，文化や歴史といった，人びととの有意味な関係が網の目のように映し出される。そのような身近な自然を一方向からみて合理的に改変していくことが，他方において関係性の網の目（web of relations）のバランスを崩す，いびつな合理性に転化することにもつながった。生態系の単純化は人々の働きかけの単純化の反映でもあった。

かつて西田幾多郎は「自然の本体はやはり未だ主客の分れざる直接経験の事実」と語ったが［西田 1950＝1979：102］，今日の生業をめぐる活発な議論にみられるように［安室 1998，2003，松井 1998 a，1998 b，2004 など］，生業活動を含め，自然を身近なものとする人びとの日常世界を紐解き，かかわりあう自然への意味を豊富化する議論は重要である。そこに見られる自然とのかかわりは，個人的なかかわりであると同時に，地域（community）の社会関係へと翻意されるかかわりでもある。複数の人が同じ空間にある自然に働きかけ，同一の資源にアプローチするとき，あるいは互いに影響しあう質の違う関係を持つとき，そこに共通のもの（commonality）の存在を認めることができる。それは，時と場合によって変化し，あるものは忘れられ，またあるものは忘却の彼方から引き出され，別のあるものは新たに形成されていく［Ostrom, E., 1990］。

本稿は，新潟県阿賀野市（旧北蒲原郡安田町）千唐仁[(1)]の自然の変化を，千唐仁に生まれ，暮らしてきた市川文子さんの「語り」に着目しつつ論じる。

千唐仁は「船頭集落」と呼ばれ，阿賀野川への生活依存が高かった集落であり，それだけに高度成長以降の生活文化の変容も大きかった。阿賀野川への依存は食生活においても高く，そのため新潟水俣病という高度成長の負の側面である公害病被害を経験した地域でもある［関 2003 a］。

文子さんは農業という，千唐仁のなかでは川から遠い生業を営んできたが，その語りには千唐仁が阿賀野川とともに育んできた生活文化にあふれている。また，新潟水俣病第二次訴訟の原告として被害者運動を支えてきた女性でもある。

本稿は，はじめに，生活様式の変化に伴う自然との「疎遠」と公害問題をモメントとした半強制的な自然との「分断」というふたつの側面の絡み合いのなかで［関 2003 b］，千唐仁の暮らしがいかなる変化をしてきたかを明らかにする。次に，そうした「疎遠」と「分断」にもかかわらず引き継がれてきた関係に着目し，生活文化を射程に入れた自然＝川を考える糸口を提示したい。

❷……川から陸へ

尾瀬ヶ原と尾瀬沼から流れ出た水は只見川となり，伊南川を合わせて流れ出る。只見川は，猪苗代湖を源流とし，大川と合流する日橋川と出会って阿賀川になり，県境を越えて阿賀野川となる（図1）。

阿賀川の「阿賀」は「アカ」「水」を意味する仏教用語の「閼伽」に由来し，水量の豊富さを意

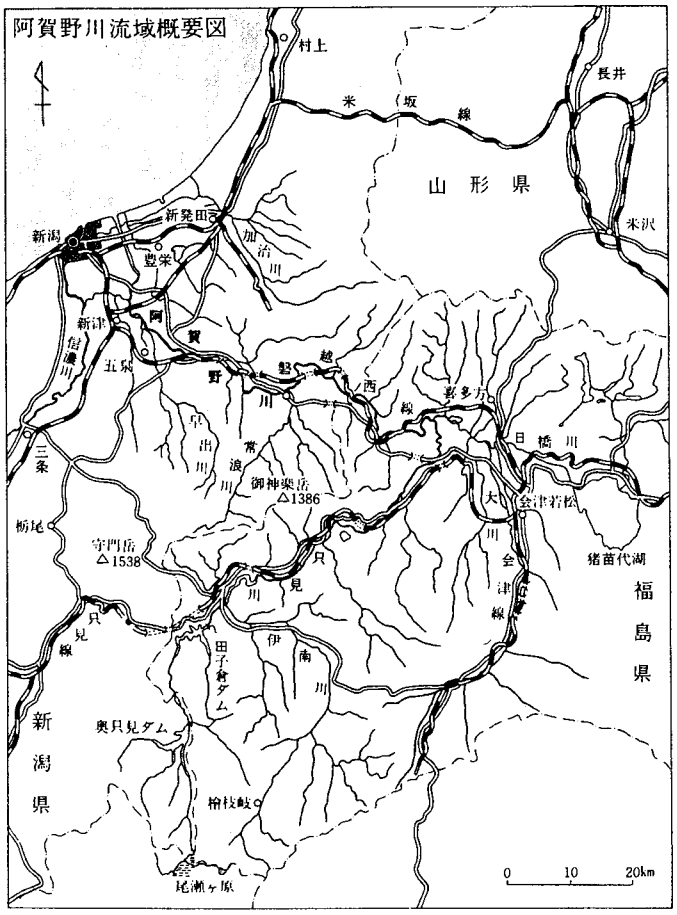

図1　阿賀野川流域概要図
出典：豊田他編 1978：263.

味するといわれ，阿賀野川の「阿賀野」は「清い水」を意味するアイヌ語の「ワッカ」に由来する説と，開墾しても水田にならない隆起した土地を意味する「揚野」のあて字と言う説があるという［村石編 1979：260，398］。阿賀野川の語源は，この川がもたらしてきた豊かさと厳しさとを示唆するものとなっている。

この阿賀野川のほとりに，千唐仁はある。「センは滝，トージは唐地，鮭滝のある川添いの弓なりに曲がった台形地形を意味する」とされるが[2]，耕作地をめぐる争いがあったので「戦闘地」に由来するという説もある[3]。2004 年現在，戸数 93 戸。古くより耕作地は少なく，田畑で生計をたてるのが困難な集落である。ならば千唐仁は貧しい土地かというと，そうではない。金子智「千唐仁村の歴史」（町史の校正原稿といわれたが，公表されたか否か不明）によると，田畑に恵まれた地域で餓死者が続出した大飢饉のときも，この地で餓死者が出たという記録はない。阿賀野川が，田畑の不足を補完する水運，砂利採取，漁撈などの生業の舞台として，重要な役割を果たしてきたからであった。

なかでも特徴的なのが男衆の「船頭」という仕事で，千唐仁は「船頭集落」であるといわれた[4]。川沿いという土地柄を利用して酒の醸造販売をした者あり［安田町史編さん委員会編 1985：123］，船

頭でこそできた護岸工事の「川仕事」に従事する者あり[5]，川仕事に出てきた男衆の休憩処を営む者あり[6]と，船頭仕事に関連し，または付随する仕事が営まれては消えてきた。

長く上流と下流の物流に携わっていた千唐仁の船頭は，揚川ダム（1963年）と阿賀野川頭首工の建設（1966年）によって舟運の役割が減じていくなかで，新潟大火（1955年）や新潟地震（1964年）以後の砂利需要の増加を受けて，千唐仁地先の川砂利採取および砂利船による運搬に仕事を特化させていった[7]。

他方で，女子衆や一部の広い土地持ちの農家は1940年頃までは養蚕と畑，以後，桑畑が開田されてからは田畑の仕事を主とした。畑は河川敷や川をわたった大島というところにもあった。サンパ舟という小舟を漕いでいく大島は，狭隘な耕作地しか持たない，多くの家にとって重要な畑であったが，砂利採取が盛んになってからは砂利採取場に変わった。

川砂利採取・砂利船運搬は，モータリゼーションの進行，川砂利資源枯渇に伴う採取規制強化によって，徐々に斜陽となった。さらに，砂利産業は川砂利から陸砂利への転換で，川から離れていった。護岸工事の工法の変化は川仕事を陸の仕事とした。陸にあがらなかった船頭は阿賀野川ライン下りの観光船の船頭となり，川との関係を維持した。

生業構造の変化は，生活様式の変化と相俟って，川との関係を疎遠にしていく。燃料革命は出水のときの「焚き物」拾いを不要とし，農業の機械化は堤防や堤外地での牛馬のマグサ刈りを無用にしていった。さらに挟み込まれる断絶があった。1965年に新潟水俣病が発生してからは，子供たちの遊び場であった阿賀野川は遊泳禁止となり，1972年に安田町（当時）から認定患者が発生すると，漁撈が千唐仁の集落で持つ意味は逓減していくのである。

以下では，阿賀野川と密接に結びついていた千唐仁に生きてきた，市川文子さん（農業）のライフ・ヒストリーのなかから，千唐仁の生活の変化を概観しよう。

❸……視線が交錯する原風景としての川

千唐仁の生活が阿賀野川とともにあった1935（昭和10）年3月，文子さんは1男6女の次女として安田村（当時）千唐仁で産声をあげた。生家の屋号は「喜六」だったが，実父が1代で材木商として財をなしたことから，当時は，「材木屋」とも呼ばれていた。

材木商の仕事は，阿賀野川の護岸工事現場への資材搬出と建築用木工材の製材が主で，千唐仁の上流にある小松や三川村から粗朶，柴，木工用の材木，杭材用になる丸太を買い付け，馬車で工事現場に搬出した。阿賀野川の水栓はすべて実家で木材を出したと，文子さんは語る（写真1）。

「父はめずらしく親孝行で子煩悩な人でした。父母と祖母，兄姉妹10人の大家族でしたが，父は，毎夕，仕事から戻ると祖母に今日の出来事を説明していました。父は，資材を買いに山に入ると，時期によっては山鳥のお肉などを持ってきたようでした。11月，12月になると，私もよく小松まで鮭をもらいに自転車で行ったものです。祖母は，食糧不足の頃でも，お肉や魚，イクラなどを入れた雑炊が好きで，当然，私たち兄姉妹も食べ物で苦労したことなどは覚えていません」。

千唐仁の集落では，戦中・戦後でも，食糧不足で苦しんだ話はさほど聞かない。阿賀野川は，豊富な漁撈資源は勿論のこと，「食いぶちを稼ぐ」だけの現金収入をもたらしていた。上流と下流と

写真１　阿賀野川の水栓（1960年代前半頃，市川文子氏所蔵）

の物流を支える船頭仕事は，千唐仁の主たる生業であり，多額の現金収入をもたらした。船頭は釜で最上の白米を炊いた「船飯」を食べており，病人がいる家ではこの船飯を求めて船着場に物々交換に来た［安田町史編さん委員会編 1997：31］。

加えて，現金収入源として「川仕事」という護岸工事の仕事もあった。阿賀野川は1913（大正２）年の大洪水後に国の直轄工事で河川改修が行なわれており，船頭集落である千唐仁でも，男衆は川仕事に舟を出して従事し，女子衆は土方仕事で陸側から川仕事を支えた。文子さんの生家は，この護岸工事に資材を搬出し，材木屋としての稼業を成功させたのである。

阿賀野川が舟運や川仕事で栄えていた頃，川向こうには千唐仁の女衆が通う大島の畑があった。川には雑木の１本もなく，堤防から向こう岸まで一望できる景色だった。国民学校の「つづり方（作文）」の時間，教室の窓からみえる「日本一の阿賀野川」の見晴らしの良さに，「心身ともに幸せな学校生活をすごしています」と書いた記憶が文子さんにはある。

阿賀野川はまた，さまざまな思い出の舞台であった。春にフキノトウ，ツクシ，ヨモギ，ツゲノコ，シカシ，ノイチゴを摘み，夏の暑い日に泳ぎ，夕暮れまで堤防の上で遊んだ。堤防脇で馬草刈りの手伝いをし，魚釣りに興じる子供たちがいた。筏師に「おーい」と大声で呼びかけ，ときに「鉈，貸そか」と叫んで怒られる子供もあった。筏師が鉈を必要とするのは，筏と体を結びつけた縄を切るとき，転覆する恐れのあるときだったからである。

阿賀野川に遊ぶ子供たちを視線の端におく「川の目」は，筏だけでなく，帆掛け舟，小型のサンパ舟からも注がれていた。大人たちは飲用水として阿賀の流れを汲み，四季折々の獲物をねらって漁をし，川向こうの畑に舟で通った。集落の前には大小の船がおかれる川湊があった（写真２）。大人たちの仕事の世界は，川の目と陸の目の両方で子供たちの世界をそれとなく見守っていたのである。「思えば，老いも若きも，男も女も，みんな幸せな時代だった」と，文子さんは回想する。

「幸せな時代」は，千唐仁の誰もが阿賀野川にかかわりあう風景として記憶されている。堤防の内にも外にも人がおり，川の目と陸の目の交じりあったところに，子供たちの世界が存在していた。

写真2　昭和10年代の千唐仁の川湊
（安田村國防婦人會大和班（年不詳）『おもかげ』所収の写真，市川太介氏所蔵）

それが文子さんの原風景としての阿賀野川である。

現在，阿賀野川を背に堤防にたつと，寄り添うように立ち並ぶ集落の家並みの外側に，田圃が遮るものなく広がっているのがわかる。子供たちが桑（カンコ）の実の時期に畑を荒らして怒られたという桑畑を昭和10年代に開田し，区画整理した田圃である。一部，減反で畑作に切り替えたかつての田圃も混じっている。

逆に阿賀野川を振り向くと，「とても歩いてなんか行かれない」荒地の奥に水面が見える状況となっている。ほとんど足を運ばなくなった阿賀野川について，「堤防の護岸もね，あんな（雑木や草で）ひどいでしょ。やっぱり行きたくないもんね，見ただけでおっかなくて。子供だって，阿賀野川でなんか遊ばれない，学校でも泳ぐのは禁止になっているしね」と，文子さんは語る。(8)

❹……川での用事

1952（昭和27）年の冬の夜，屋敷の門で火をたいて花嫁行列を迎える家があった。冬の花嫁行列では雪玉がぶつけられる慣わしで，雪玉を避けるに必須の蛇の目傘をさし，嫁入り衣装に身を包んで，文子さんは生家のすぐ近くの家に嫁入りした。道路を挟んだはす向かいの婚家には，鏡台，長持，下駄箱，桐箪笥，布団，着物，お膳に椀などの嫁入り道具が，馬車に積まれて運び込まれ，お披露目に並べられた。

「働きがよければどんな良い家にでも嫁にいける」と言われ育った文子さんの婚家は，千唐仁のなかでは大きな農家であった。嫁入り時は文子さん夫婦のほかに，大祖父母，義父母，住み込みで農業を手伝っていた奉公人，他家から預かった2人の子供がおり，合わせて9人の家族であった。

「人を雇うか嫁をもらうか」といわれたように，結婚が労働力の獲得という意味合いを濃くしていた時期である。農作業は，牛や馬を使って田畑を耕起する以外はほとんどが手作業であった。結婚後の文子さんは朝から夜まで懸命に働いた。農繁期には，田圃で手の先が見えるまで働き，夕食

写真3　機械化前の砂利採取の様子（1950年代後半頃，市川美策氏所蔵）

を終えると納屋でできる作業をするのである。

「奉公人と2人で農作業をしていてね，夕暮れどき，『姉さ，もうあがりましょう，また明日も日がでるから』と言われたことがあったけれど，お姑さんの手前，そんなこと，とてもじゃないけどできないわね。」

農作業に明け暮れる身からすると，姑から離れ，舟を漕いで中洲の大島の畑に作業に出向き，嫁同士でおしゃべりして一休みしてから戻ってくる他家の嫁はうらやましい限りだった。陸に田畑を広く持っていた婚家では，大島を耕すことはなかったからである。また，夫婦で玉石や砂利を採取して新潟へと運び，仕事が終わった後は1泊して戻ってくるという話をうらやましく聞いたという（写真3）。姑にどんなに良くしてもらっても，嫁は姑の前では気が抜けなかった。文子さんにとって，阿賀野川と交わる仕事は，自由でのびのびした時間をもたらすもののように感じられていたのである。

労働力としての嫁は出産間近でも産気づくまで働かねばならなかったが，阿賀野川でとれる川魚は，妊娠・出産期の嫁への最大の気遣いであった。実家や親類関係のある近所の家からは魚が差し入れられ，3人の子供のお産時期には朝夕にたくさんの魚料理が差し入れられた。差し入れてくれた実母は後に水俣病に認定されている。妊娠・出産期の川魚の多食が文子さん自身の水俣病発症の原因にもなるのだが，餅や卵とならんで滋養ある食物であった川魚を豊富に食べることは，阿賀野川の岸にある集落ならではの贅沢であったといえよう。

洗濯はもっぱら嫁の仕事で，出産後のオムツ洗いには，必ず阿賀野川へ行った。洗濯場は石積みの足場となっており，そこにずらっと並んで洗濯するのであった。冬の寒い日の素手での洗濯は，洗ったばかりの洗濯物がパリパリと凍って難儀する。しかし，季節が良いとき，阿賀野川で洗濯をしながら女子衆（嫁）同士で語らうひと時は，たいへん楽しかったのだと，文子さんは語る。モンビ（門日）[9]などで農作業が休みのとき，山のような洗濯物を背負って川へ行く。汚れたオムツを洗うと魚が寄ってきて，タオルですくいとって遊ぶ女子衆もあったという。阿賀野川の洗濯は，家事

という労働であるだけでなく，農作業の合間の楽しみでもあった。

他方で，阿賀野川で苦労したのは，焚き物（燃料）となる流木拾いの仕事だった。山のない千唐仁では，焚き物を阿賀野川から調達した。雨季に阿賀野川が増水すると，男衆はサンパ舟で流れ木拾いに漕ぎ出し，女子衆は岸辺から熊手を使って細かな流れ木を掻き寄せた。集めた流れ木は岸に積み上げて乾くのを待ち，田畑で作業ができないときに束ねに行った。これを「ガス束ねに行く」といった。「束ねた流れ木を大きなカゴに入れて背負い，堤防の上まで運ぶのが辛かった」，と文子さんは語る。「実家は材木商で製材所も持っていたから，焚き物には不自由しなかった。流れ木拾いは経験ない仕事だったこともあって，余計に辛く感じたのだろうね」，と。

このように，千唐仁においては川から遠い生業に位置づけられる農業を営んでいても，阿賀野川は生活に密着していた。生業の場としてだけでなく，さまざまな用事を足す場として，千唐仁の人びとは阿賀野川に足を運んでいたのである。

❺……切れた関係

文子さんの幼少期である戦中・戦後から，高度成長期を経た1970年代後半までの千唐仁には，阿賀野川との多様な関係が存在していた。前節までに述べてきた事柄を含めて，どのような関係があったかを動詞に着目して整理したのが表1である。

表1　千唐仁における阿賀野川との関係性とその変化

関係性の細目		関係性の事例	キー・ワード	現存する関係
稼ぐ	運ぶ	人の移動…上流と下流，右岸と左岸を結ぶ交通網。 荷物の運搬…物流の要。筏や大小の船。	水運・渡船夫・船頭・筏師	
	治める	護岸工事では，船で仕事する男衆と陸での土方に出る女子衆がいた。仕事帰りに休む茶屋もあった。	川仕事・土方仕事	
	採る	玉石・砂利は，揚川ダム完成（1964年）前は津川・鹿瀬方面まで採取に行き，完成後は主に千唐仁地先の大島で採取。砂利は，機械化される以前は，ジョリンという道具を用いて砂利を採取し，天秤棒にかついだ。	砂利船・船頭	
食べる	獲る	サケ・マス…旧法の時は魚場の入札が行われ，豊漁の儲けが大きかった。時期になると“アンジャ小屋”が建てられ，ここが男衆の交流の場にもなった。 その他の魚種…サケ・マス・アユなど特定魚種を除く魚類は新法になってからも慣行により比較的自由に獲られていた。	“川師” 漁撈	漁業組合員による漁。
	耕す	舟で渡る大島を含む河川敷の畑を耕し，主に根菜類を作った。なお，陸の畑とあわせて，収穫物の一部は女子衆が市に運び，売った。市での稼ぎは女子衆の収入となった。耕作に用いる牛馬には堤防の草を与えた。	畑作	大島を除く河川敷に一部残る。
飲む		新潟に行く船の水がめには，早朝，流れの速い瀬で汲まれた水が入れられた。各家では井戸水を主に用いていたが，阿賀野川の水で入れるお茶は美味とされた。男衆は正月の若水汲みに阿賀野川に出向いた。	飲用水	
拾う		焚き物…大水のときに家族総出で焚き物を確保。材木用の丸太が流れてくることもあり，それで小屋を建てたという人もあった。	燃料確保	

洗　　う	洗濯では，川から遠い女子衆は用水を使うこともあったが，汚れたオムツは必ず阿賀野川で洗った。井戸端会議ならぬ，“川端会議”で畑の状況などの情報交換も。	洗濯場	
遊　　ぶ	子供集団で魚とり，水遊び。石を川底に落として競争で潜って拾う，川の向こう岸まで泳いで渡るなど。男の子は対岸まで泳いで渡って一人前と看做されたという。勝手に舟を漕いで怒られたという子もいた。遊びを通じて川を見る目が養われ，大人になってからの生業に役立ったという人もある。	子供の社会化	
送　　る	盆送りの日は「おしょれぼ様（おしょうれんぼ様）」の供え物（ハマナス，シマウリ，ホオズキなど）を阿賀野川に流す。これを「川送り（川へ送る）」といい，「舟に乗り遅れないように」，昼前に行う。なお，下流集落では，阿賀野川の水は，死期の近づいた人が飲む“末期の水”でもあるという＊。	彼岸への流れ	現在も継続。
清　め　る	ヘビ，カエルなど小動物の死骸，病気で全滅した蚕などは阿賀野川に流した。良くないものは“川へ流す”のだと表現される。	浄化	

注：＊は堀田［2002：28］による。

ここから，阿賀野川が現金収入を得る稼ぎの場であり，漁撈や河川敷耕作を通して食を支える場であったことがわかる。さらに，子供たちが遊び，川に用事を足しにやってきた大人たちが言葉を交わす，交わりの場であったこと，人と自然との関係が，人と人との関係を伴っていたことがわかるだろう。

当然ながら，このような関係性の様態は戦中・戦後，高度経済成長を経て急激に変化した。現在ではこうした関係性のほとんどが遠い記憶となりつつある。日本のどの地域にも少なからず押し寄せた生活様式の画一化の波は，千唐仁では，阿賀野川との関係を切断するベクトルを向いてきた。

電気，ガス，上水道の普及や家事の電化，陸運の発達は，千唐仁の生活を変化させた。阿賀野川の洗濯も焚き物も必要なくなった。

川から離れていく過程は，農業を営む文子さんの生活にもみられた。農作業が機械化される前は，田畑の耕起，田の代かきや草取り，刈り取った稲などをハサ掛けするための運搬などに，牛馬，特に馬が必須であった[10]。その餌を調達するため，阿賀野川の堤防で毎朝，草刈をしなくてはならなかった。難儀な仕事だったという。それが，1961年秋の第二室戸台風の影響で電気が止まったため，耕運機を購入してそのエンジンで脱穀をしたのである。これが，最初の機械化であった。

「田圃を広くやっていたから，電力の回復をまっていられなかったの。その頃，千唐仁には耕運機はなく，身上を潰してしまうくらい高価だから『身上（しんじょう）ぶつ耕機（こうき）』だといわれていたのね。それからバイク，小型特殊の免許をとり，田植え機やトラクターを動かすようになり，車の免許を取ったの」。

文子さんが車の免許をとったのは，1972（昭和47）年か1973（昭和48）年頃で，千唐仁では3番目くらいだったという。この時期，上流のダム建設によって川砂利の補給がたたれて川床の低下問題が発生[11]，1974（昭和49）年には川砂利採取の認可量が激減，砂利運搬船はトラックに押されて消えてゆく[12]。

千唐仁を含む当時の安田町から水俣病の認定患者が出た1972（昭和47）年以降は，川魚漁も激減した。1977（昭和52）年，文子さんは水俣病の認定申請をし（申請棄却），以後，千唐仁を中心

に展開されていた安田町の未認定患者運動に加わることとなった。[13]

このような過程を経て，文子さんと阿賀野川とのかかわりは徐々に細くなっていく。1970年代以降についての文子さんの語りからは，阿賀野川はすっぽりと抜け落ちるのである。

切れた関係を象徴するかのように，現在の阿賀野川はある。堤防の上に立つと開かれた風景の広がる俯瞰図であった阿賀野川は，現在，繁茂した雑木林で遮られている。視界を遮る雑木林は「川の荒れ」という風景的荒廃として捉えられており，現に展開されている阿賀野川での人々の営みを密やかなものとし，集落の外部においている。[14]

とはいえ，もちろん，阿賀野川との関係がすべて切断されているわけではない。川で石や流木を拾い，オブジェにして楽しむ人がいる。サケ・マス，アユやカニの時期には，漁業組合員や遊魚証をもった太公望が阿賀野川に足を運ぶ。だが，漁撈は集落全体の関心事から一部の関心事になっている。さらに，その獲得物は「たくさんあるときにはない人にくれてやるし，逆にないときにはもらってくる」という，集落内の交換による資源均衡化システムから抜け落ちてしまった。[15] 川魚の分配を通して，集落として共有されてきた漁撈への関心は薄れ，川との関係は個別化の方向を辿ったのである。

❻……引き継がれる関係

写真4　上流の小松集落でみられる伝統的なおしょれぼ様の飾り（2003年権瓶耕平氏撮影・提供）

他方で，集落として共有され，引き継がれている関係がある。それは，ひとつには，増水時の阿賀野川を眺めるという行為である。千唐仁の人びとは，川が増水すると堤防に上がり，かつての洪水の思い出話をする［村井編 1992：186］。2004年の新潟・福島豪雨の際には，文子さんも久しぶりに堤防の上にあがり，阿賀野川を眺めたという。

いまひとつは阿賀野川での盆の「川送り」である。[16]

阿賀野川沿いの集落では，盆には仏壇に「おしょれぼ様（おしょうれんぼ様）」といって，ハマナス，ホオズキ，ナシなどが飾られる。一昔前はどの家も仏壇の前に竹を組み，2つ1組で糸につるしたハマナス，ホオズキなどを飾り，仏壇前に新品のゴザ飾ったという。文子さんの家では，今は簡略化して，皿もりにしている。これにエゴという海草でつくった豆腐状のもの，ナスとキュウリをさいの目に切った“あられ”，

シマウリなどを供え物とする（写真４）。

８月13日の盆の迎えの日には，迎え火を焚き，「しょれぼ，しょれぼ，あかりについてこい，こい」と唄いながら，祖先の霊を家に招き入れる。そして，16日の送りの日には，彼岸へとむかう「舟に乗り遅れないように」，午前中におしょれぼ様の飾りや供物を阿賀野川に流す。

盆行事に組み込まれた阿賀野川とのかわりの風景は，いまも集落の人びとの多くがごく自然に行っている行為の風景である。文子さんの家では，川送りの役は４，５年前から若夫婦に交代して続けられている。川との関係が切れた生活のなかで，普段は下りることのない集落脇の堤防を下りての川送りに，阿賀野川のほとりに暮らす人びとが引き継いでいる河川文化の一端を見ることができる。

ただし，川送りも，衰退の方向を向いている。その原因は自然・環境に配慮した人びとの行為自粛という点にある。ゴミ問題や河川美化の理念が浸透するにしたがい，川送りがゴミを河川に捨てることに等しいという考えが出てきた。おしょれぼ様を流す人のなかには，「近頃は川にゴミを捨てるのは良くないと，おしょれぼ様をゴミの日に出す人もいるけれど，仏様のもので，自然に分解するものだから」と弁明する人も多くみかけられる。

こうした状況から，生活様式の変化による川との疎遠，ダム建設や公害問題などによる川との分断に加え，自然環境の保護の意識が意図せずして川を遠ざけるという側面が見えてくる。

❼……おわりに

1997（平成９）年に河川法が改正され，自然や景観の保護，親水など川と人との関係を保持するための仕掛けが各地で考えられるようになっている。阿賀野川でも，失われた風景を現代的に蘇らせるかのように舟運の歴史が読み解かれ，阿賀野川および信濃川河口に船を運航させる試みが検討されている［江崎・小池 1998，財団法人リバーフロント整備センター 2001：242-245］

川との関係を考えるとき，過去の歴史から学ぶことは多い。だが，現在もなお引き継がれている関係にどのような評価を与えるかも検討されて良い。川と人との関係性の網の目を密にしていくこと，すなわち，かかわりの多様性をもたらす川づくりは，阿賀野川沿いの集落のかかわりと，集落の外にある「世間」のかかわりとを併せてこそ可能になると考えるからである。そして，集落における川とのかかわりは，暮らしに染み付いたものしか残らないからである。

文子さんをはじめ，千唐仁の人びとはしばしば「ほんと，阿賀野川はいい川だったねぇ」，と語る。「いい川」とはどのようなものであるか。本稿で論じてきたのは，「いい川」が関係性の網の目が複雑に入り組んでいる川に他ならないということである。「いい川」の語りを過去形から現在形にするためには，過去を参照しつつ新たな関係性を創出する仕掛けをつくることと同時に，引き継がれてきた関係を肯定するような仕組みを生み出すことが必要になるのではなかろうか。

註

(1)――2004年4月より町村合併で安田町千唐仁は阿賀野市千唐仁となった。

(2)――安田町史編さん委員会の廣田康也氏よりいただいた廣田氏著の「郷土歴史散歩」の記述による。

(3)――千唐仁在住の市川与二氏よりこの説を教えていただいた。

(4)――齋藤恒・荻野直路・旗野秀人（1981）によると，1978年時点で，千唐仁の98戸中，船頭経験者がいる家は85戸にのぼっていた。

(5)――護岸工事は，木材や粗朶などで組んだ沈床に石を入れて堤防をつくるというもので，川で作業が行なわれた。舟に石を積んで沈床を沈める作業などは，船頭仕事ができる者，舟を漕ぐのにたけた者しかできなかった。

(6)――前出の市川与二氏の家は，氏が子供の頃，酒やまんじゅうを出す茶店を営んでいた。

(7)――千唐仁の古文書である「市川家文書」（吉田東伍記念博物館保管）に，1896（明治29）年の「砂利取料割渡帳」があり，砂利採取が以前より複数の生業活動のひとつに組み込まれていたことがわかる。

(8)――護岸工事やプール施設の整備とともに，子供の川離れが進んできたのは阿賀野川に限ったことではないが，阿賀野川が遊泳禁止になる契機は1965（昭和40）年の新潟水俣病の発生にあった。

(9)――モンビとは「農休日と御馳走の提供を組合わせた行事」［安田町史編さん委員会編1997：136］のことである。

(10)――山に入る場合など仕事によっては牛のほうが効率よかった。砂利道を歩かせるため，蹄鉄を打たない牛には男衆がわらじを作って毎朝はかせた。だが，牛は主に肥育して売り，現金収入を得ることを目的に飼っていたのだという。

(11)――「日本の河川の多くは，第二次世界大戦直後ころまでは河床上昇の傾向が強く，上流での砂防は重要な治水事業であった」が，川砂利採取による河床低下により，用水取水の困難，護岸侵食，河口付近の海岸浸食などの問題が発生したため，「その状況が逆転」した［大熊1988：72］。

(12)――なお，1981（昭和56）年には砂利運搬船の共同廃棄事業が実施された。砂利採取業の変遷については，石田他編［1990］を参照のこと。

(13)――千唐仁では，1973（昭和48）年，船頭組合の要求で新潟県による集団検診（船頭検診）が行なわれた。1976（昭和51）年からは，千唐仁で新潟水俣病の集団検診を求める運動，自主健診を求める運動が独自に始まり，以後，行政不服審査請求の運動を軸に，第二次訴訟提訴につながる息の長い運動が展開される［関2003a：199-219］。

(14)――小椋［2000：47-51］は，ここ1世紀余りの植生景観の変遷を検討し，過去に豊かであったと思われがちな植生がむしろ現在より貧弱な場合があること，植生景観の変化は人々の自然への依存度や利用状況の変化を反映していることを明らかにした。現在，阿賀野川の河川敷や中洲の植生は豊かになり，中洲にはアオサギなどの鳥類も確認できる。だが，文子さんをはじめ阿賀野川と幾重も関係を結んで生活してきた世代にとって，現在のいわゆる生態系の豊かさは阿賀野川の豊かさを意味しない。阿賀野川と結ぶ関係の多様性こそが阿賀野川の豊かさであり，植生景観としては現在より貧弱な過去が，見晴らしの良い日本一の大河であったと語られるのである。

(15)――内山［2001：26］は，ある野菜を届けたことで「お返し」があり，「お返しのお返し」をすることで，そのまた「お返し」がくるという繰り返しについて，それが「集落間で豊作のものを交換し合い，結果的に作柄を平均化させる役割を担って」いること，「お返し」が集落内に配られることで，「最終的には，家々の作柄が平均化」されたと述べている。千唐仁では，いまも野菜などは「あればくれてやる，なければもらう」のが自然な行為である。かつては川魚もそうであった。

(16)――川送りは精霊流しのことである。

参考文献

江崎竜二・小池達男　1998「新潟市及びその周辺地域における河川舟運構想について」『リバーフロント研究所報告』9：289-295

堀田恭子　2002『新潟水俣病問題の受容と克服』東信堂

石田芳英他編　1990『AGA草紙②阿賀野川の舟運』阿賀に生きる製作委員会

松井　健　1998a「マイナー・サブシステンスの世界――民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『民俗の

技術』朝倉書店
松井　健　1998 b 『文化学の脱＝構築――琉球弧からの視座』榕樹書林
――　2004 「マイナー・サブシステンスと環境のハビトゥス化」松井健編『島の生活世界と開発 3　沖縄列島―シマの自然と伝統のゆくえ』東京大学出版会
村井勇編　1992 『焼いたサカナも泳ぎだす―映画「阿賀に生きる」製作記録』記録社
村石利夫編　1979 『日本全河川ルーツ大辞典』竹書房
西田幾多郎　1950 （＝1979）『善の研究』岩波文庫
小椋純一　2000 「移り変わる植生景観と人々のくらし―京都近郊の事例から」嘉田由紀子・槌田劭・山田國廣編『共感する環境学―地域の人びとに学ぶ』ミネルヴァ書房
大熊　孝　1988 『洪水と治水の河川史―水害の制圧から受容へ』平凡社
Ostrom,E.,　1990　*Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press.
斉藤恒・荻野直路・旗野秀人　1981 「新潟水俣病患者と認定の問題」『公害研究』10-3：36-42
関　礼子　2003 a 『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』東信堂
――　2003 b 「生業活動と『かかわりの自然空間』―曖昧で不安定な河川空間をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』105：57-87
豊田武・藤岡謙二郎・大藤時彦編　1978 『流域をたどる歴史二＜東北編＞』ぎょうせい
内山　節　2001 「『自然と労働』についての方法の問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』87：17-33
安田町史編さん委員会編　1985 『近代安田人物史』安田町
――　1997 『安田町史　民俗編』安田町
安室　知　1998 『水田をめぐる民俗学的研究』慶友社
――　2003 『水田漁撈の研究（平成 11～14 年度科学研究費補助金〈基盤研究C(2)〉研究成果報告書）』
財団法人リバーフロント整備センター　2001 『川・人・街―川を活かしたまちづくり』山海堂

追記：本稿は住友財団 2002 年度研究助成（助成番号 023369）による調査データを用いている。

（立教大学社会学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2004 年 9 月 12 日受理，2005 年 1 月 15 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol. 123 March 2005

River Reflected in Everyday Life: Culture and it's Changing of Sentōji in the Reaches of Agano River

SEKI Reiko

In this paper, I take notice of the changes in the relations between the river and people in the reaches of Agano River in Niigata Prefecture in order to make clear following points. 1) On the one hand, the people distanced from the river because of the changing of the way of life, and the other hand, the people cut the river due to the pollution what is called Niigata Minamata Disease. 2) But the people still have some relations such as Kawaokuri (In August, people make offering to their ancestor and throw that into river).

However the Kawaokuri will be difficult to go on by reason of conservation of environment. So, in this paper, I consider a contrivance, that brings about emergence of new relations, to refer to past relations. And above all, I point out the importance of an arrangement for sustainable relations.